

民族的他者意識の形成過程

——在日華僑女性のライフヒストリーの分析から——

山 本 須美子

目 次

- I. 序
- II. 結婚前—「中国人」としての自己意識の形成
 - 1 「家庭ではしっかり中国人として生きていた」とは？
 - 2 「日本人」との関係
- III. 結婚後—「中国人」としての自己意識の保持
- IV. 結び

I. 序

「民族とは何か」という問いに明快に答えることは不可能であるが、あらゆる文化や民族が、人工的な虚構であるという見解は、今や我々の共通認識である。「日本」および「日本人」という概念も構築されたものであり、またその過程で同時に「非日本人」が作り出されてきたことは、主にマジョリティ側の知識人の言説や政策などの分析を通して指摘されている(酒井 1996, 駒込 1996, 小熊 1998)。

本稿においては、従来、言説を作り出す側に焦点を当てて分析されてきた「日本人」／「非日本人」という境界の生成維持のメカニズムを、「日本人」の他者としてみなされ、自らも異なった民族として自己規定している側の個人の視点から解釈することを課題とする。

具体的には福建省福清県出身の両親をもち、日本で生まれ育った華僑二世である一女性、調査時60歳のKさんを取り上げる。Kさんは、帰化をしているが、現在までずっと自らを「中国人」として規定している。日本社会で生

まれ育ち日本の学校で教育を受け、日本名を使い帰化をしながら、どのような日常的経験が自らを「日本人」に対して「中国人」という民族的他者として規定する意識を生み出したのであろうか。本稿ではKさんのライフヒストリーを分析することを通して、Kさんの「日本人」に対する民族的他者としての自己意識の形成プロセスを明らかにし、マイノリティ側の個人の視点から、民族境界の維持のメカニズムに解釈を加えることを試みる。

Kさんの「中国人」としての意識は、「日本人」に対して自らを「中国人」として規定している。Kさんは中国との国交回復後両親の故郷を訪れた時、現地の中国人に「日本人」と言われて、「梯子をはずされたような感じ」がし、自分は正真正銘の中国人ではなく、「華僑」だと思ったと述べている⁽¹⁾。それは現地の中国人に対して「華僑」なのであって、Kさんは「日本人」に対しては「中国人」であると自己規定している。本稿は、このような、日本社会に生まれ育ちながら、「日本人」に対して自らを「中国人」として規定する民族的他者意識の形成プロセスを、Kさんのライフヒストリーを通して分析する。また、Kさんは、国籍に関わらず中国大陆あるいは台湾に民族的出自を持つ者全体を指すときに華僑という用語を使っているが、筆者も同じ意味で華僑という語を用いる。

これまでの在日華僑に関する研究は、歴史的あるいは社会経済的領域に集中していて、本稿のような民族意識の形成に関する問題を扱った研究は限られている。これまでの数少ない在日華僑の民族意識に関する研究（載 1985, 山田 1983, 杜 1991, 過 1999）が共通に指摘している点は、中国国籍保持者である華僑から、日本国籍を有する華人化の趨勢と日本社会への同化傾向である。この「華人」という用語は、民族的出自は中国であるが当該居留国の国籍を取得した者を示し、中国国籍保持者である「華僑」と区別するために用いられている。華僑は、字義的解釈からすると、華は中華の華で、僑は仮住まいの意味であり、居留国の国籍を取得したものは、もはや仮住まいのいわゆる僑民ではないので、「華人」と呼び替えることが妥当だという考えに基づいている⁽²⁾。

この「華人」という語には、居留国の国籍を取得しても何らかの中国への帰属意識を保持している者という意味が含まれている。例えば、近年在日華

僑アイデンティティの世代ごとの変容についてまとめた過は、中国への帰属意識を放棄して、日本社会に同化してしまった者は、「華人」とはいいい難いと述べている（過 1999：174）。ここから指摘できるのは、「華人」という用語には、民族的出自が中国にある者は、たとえ日本国籍になっても「日本人」と区別されていることの方が自然であるとする考え方が含まれていることである。そして、民族的出自が中国にある者が、日本の生活様式を身につけ、中国への帰属意識を失うことを「同化」といつている。本稿で着目したい点は、こうした「華人」や「同化」という用語が、「日本人」と「中国人」という区別を所与のものとして実体化していることである。つまり、これらを用いてきたこれまでの研究は、「日本人」と「中国人」という区別を所与のものとして実体化して捉え、その前提の上で行われてきたといえる。

本稿においては、従来の研究のように、「日本人」と「中国人」という区別を所与のものとは捉えない。個人が周囲の人々と相互作用をする中で、自他の区別を意識し、その過程で境界が生成されるという視点⁽³⁾から、Kさんの「中国人」としての自己意識の形成過程を検討する。Kさんが具体的な日常的経験を通して、どのように自他の区分を意識し、それがライフヒストリーという時間性のつながりの中でどのように維持、あるいは変化しているのかを、Kさんや周囲の人々の語りを通して検討する。つまり、マイノリティ側の個人の認識において、いかに民族境界が実体化していったのか、そのプロセスを明らかにしたい。日本の民族的マイノリティ研究において本稿のような視点からの研究としては、在日コリアンを対象としたものがある。例えば浜本（浜本 1996）は、日本生まれ日本育ちの二世が「朝鮮人」という意識を形成していく過程を分析している。しかし、在日華僑を対象にしたものはない。

方法としては、個人が自己について語ったライフヒストリーを分析するというライフヒストリー法を用いる。谷はプラマー（プラマー 1991）の指摘に基づいて、ライフヒストリー法の特性を三つにまとめている（谷 1991：11）。1. 時間的パースペクティブを内蔵しているので、対象を過程として把握することが可能であること、2. 全体関連的な対象把握を志向すること、3. 主観的現実深く入り込み、内側から意味把握が可能であることを指摘している。これらの利点をもつゆえに、本稿でKさんの民族的他者意識の形

成過程を明らかにする方法として用いる。インフォーマントとしては、10年以上の付き合いがありラポールが形成されているKさんを選び、彼女へのライフヒストリーを構築するインタビューを中心に行った⁽⁴⁾。筆者とKさんが1対1で向き合う形で、筆者の質問に対して、Kさんに自由に語ってもらったり、メールでのやり取りもした。

しかしこの方法もいくつかの難題を抱えているのであり、最も重要なのが、ライフヒストリーで提示された生が、読み手—書き手—語り手を取り囲むある種の不平等な関係性の中で、検閲、自己規制、編集されたものとなる可能性である(松田 1996:195)。本稿においてその問題を克服したとはいえないが、筆者によるKさんについての記述をKさんに読んでもらい、感想を聞いたり書き換えたりする作業を行うことを試みた。

さらにKさんの夫や長男夫妻、姉妹や親戚という、Kさんの身近な人々へのインタビューも行なった。これは、Kさんのライフヒストリーを、周囲の人々の側からも捉え、多面的に把握することを試みたものであり、筆者やKさん、居合わせた家族や来訪者も加わるというような、複数の人が自由に語り合う形式を採用した。本稿では、以上のように様々な場で交わされた多様な対話と、Kさんの書いた小説やエッセイ、講演記録を資料として用いた⁽⁵⁾。調査は、1998年度トヨタ財団研究助成を受けて、1998年10月から2000年9月にかけて行った。

ところで平成13年末現在、日本における外国人登録者数は、177万8462人である(法務省入国管理局 2002)。その内中国籍は、38万1225人であり、これは外国人全体の21.4%に当たる。中国籍の外国人は、1980年には5万2896人であり(過 1999:48-50)、現在までの約20年間に6倍以上に増加している。歴史的に遡れば、Kさんの両親が来日した大正末期1925年には、在日外国人人口は2万8279人、その内2万222人が中国籍であった⁽⁶⁾。その後中日戦争など中日両国の国家間関係に影響され、華僑人口は激減したりしながら、第二次大戦後から70年代末までの30年間は、4～5万人台で推移している。特に1978年から中国が改革開放政策を取るようになってから急増し、就学生、留学生や日本人の配偶者等が増加し現在に至っている。日本に戦前から永住している人及びその子孫は、急増を始める20年前の人口である4～5万人以内

であると考えられる。正確な数は特定できないが、戦前の人口が2万人台であること、Kさんのように帰化している人もいることを考えると約3万～4万人であると推察される。過は、これら戦前から永住している人及びその子孫を世代別に三類型に大別している（過 1999：9-10）。第一は、現在70歳以上の華僑で、戦前世代であり、中国で生まれ育っている一世である。第二は、45～60歳前後の華僑で、戦前から戦後にかけて日本で生まれ育っていて、二世や三世である。第三は、20歳代～45歳前後の華僑で、日中国交から正常化以後の世代に属し、主として三世～五世となっている。Kさんは、第二の類型に入る。

また在日華僑の出身地別人口は、華北、華中、華南の各地方出身者を網羅するという特徴をもち、戦後には台湾出身者が大量に加わっている（山田 1983：27）。過は、中華街が形成された開港諸都市では、広東省人が貿易関係に携わり圧倒的多数を占め、他の都市では、分散的に福建省出身の呉服商や行商、江蘇省出身の理髪業者、山東省出身の料理業者などの雑業の分布がみられると述べている（過 1999：54）。本稿で扱うKさんの父親は、福建省出身で熊本市に居住する第二次大戦前は行商人であった。これまでの在日華僑の研究は、中華街に集住する華僑を対象にしたものが多く、福建省出身の行商人を扱ったものは、管見の限りでは、茅原と森栗による共同研究（茅原・森栗 1989）のみである。また一女性を取り上げてライフヒストリー法によって分析したものはない。本稿で取り上げたKさんは、結婚後独学で一級建築士の資格を取得したのであるが、この点は同世代の華僑二世の中では上昇志向のある例外的な女性といえる。戦前に福建省福清県から来日した華僑の二世で大学教育を受けた者は少なく、彼らにとっての成功とは、自営業を営んでお金を儲けることが一般的であった。しかし本稿のテーマである民族的他者意識の形成過程において重要な役割を果たしているKさんの生家の日常的経験は、福建省福清県出身の行商人の同世代の二世の経験として一般的なものであったといえる。それゆえKさんを取り上げた本稿の分析は、Kさんの結婚後の生き方が同世代の華僑女性として例外的なものであっても、民族的他者意識の形成過程というテーマにおいて例外的な事例を扱っているのではないと考える。以上、本稿は、従来の在日華僑研究にはない視点から、今

までにはない方法によって、ほとんど研究されていない対象を扱ったという点で、在日華僑研究における意義があると考えられる。

II. 結婚前—「中国人」としての自己意識の形成

1. 「家庭ではしっかり中国人として生きていた」とは？

Kさんは、既に三人の息子は成人して家を離れ、現在夫と福岡市で二人暮らしであるが、日本で生まれ育ち、日本の公立学校で教育を受け、中国語は両親の出身地である福建省の方言を聞いたら言っている内容が理解できる程度である。また20年前から日本名を使用し、3年前に帰化をし、親戚以外の付き合いは、全部「日本人」である。家の事情から高校を1年で中退し、結婚後、独学で自らのキャリアを切り開き、現在は、一級建築士として働いている。Kさんは、自らを「中国人」として位置づけ、「自己紹介をするときにもそれを最初に言っておかないと気持ちが悪い」という。中国名を使っていた20年前までは、名字によって「中国人であること」を示せたが、特に福岡への引っ越しを機に、息子の就職の為に後に帰化する時の名前として考えていた日本名Kを使うようになってからは、自ら名乗らないとわからないので、必ず「中国人であること」を名乗るとのことである。Kさんは「一度として自分が『日本人』だと思ったことはないし、それは帰化の前も後も同じです。」という。

Kさん自身にこのような現在まで変化することのない「中国人」としての意識がどのように形成されたのかを尋ねると、「外見の文化的差異はなくても、家庭ではしっかり中国人として生きていたのです。」という答え方をする。ここでの「家庭」とは、結婚前の家庭、生家のことである。つまり、Kさんの「中国人」としての意識は、生家における生活において「しっかり中国人として生きてきた。」ことによって形成されたとKさんは捉えている。では「家庭ではしっかり中国人として生きていた。」とはどのようなことなのかを、Kさんとのやり取りの中で再構成したい。

まずKさんの生家の歴史的背景について述べる。

Kさんの父親は、福建省福州府福清県高山市の出身で、大正時代末期(1925

年)に単身で来日し、親戚がいた熊本で、初めは薬の、後には反物の行商をしていた。前述したように華僑の出身地の相違は、それぞれ職業に結びついているが、Kさんの両親の出身地である、福建省福清県の出身者の多くは、古くから呉服の行商に携わっていた(茅原・森栗 1989)。広東省、台湾省などの他の出身地の華僑が主に携わっていた貿易商や三刃業(洋服仕立・料理・理髪)は、華僑の職業として良く知られているし、都市を中心に展開された職業である。しかし呉服行商は、農村を中心に、華僑人口が概して多くない、例えば島根県や九州という地域でも展開され、地方に分散して、全国に網の目のように広がっていた。商品は呉服のほかに、小物なども扱い、重い荷物を背負い、一般の行商人がほとんど行かないような山奥の村村を一軒一軒訪ね歩いた。福清県出身の華僑は、この行商ゆえに、日本社会の隅々に入り込んでいたといわれている。Kさんの父親も、行商するのに熊本市内から、遠いところでは阿蘇までかなり広域を歩いていたそうである。

Kさんの父親が来日した翌年、中国にいる時に既に結婚していたKさんの母親も来日し、その後男4人、女6人の10人の子供に恵まれる。Kさんは、1940年に上から7番目の子供として生まれる。母親は纏足をしていて自由がきかず、ほとんど外出することはなかったそうである。また、第二次大戦後はほとんどの福清県出身の華僑は行商を止めて、店を構えたりしたが、Kさんの父親も戦後は行商をやめ、熊本市内のアーケード街の一角に布地を扱う店を構えた。

Kさんに生家における日常生活について筆者が詳しく尋ねたところ、記憶を遡って語ってくれた。それらの語りは、大きく二つに分類できる。第一は、生家に出入りしていた華僑達についての語りであり、第二は、生活様式の違いについての語りである。

まず、第一の生家に出入りする華僑達についての語りから、Kさんの生家における人間関係を再構成したい。

「叔父の他に、おじいさんの弟というおじさん一家も同じ家に住んでいた。」

「小学一年生までいた家の二階には、百貨店のコックをしていた独身の叔

父がいたので、麻雀の溜まり場になっていて客が特に多かった。」

Kさんは小学校の低学年までは、家庭がまだ貧しかったようで、親戚の二家族と共に三世帯同居をし、その知り合いの出入りがいつもあった。

「私の家から他の華僑の家までちょっと距離があっても、非常に身近に感じていました。うるさいけど親しい親戚がいっぱいいるような感じです。良いことをしても悪いことをしても誰かに見られているような、小さな村落の住人であるような感覚でした。」

Kさんの育った熊本では、華僑の集住地区のように近くに多くの華僑が住んでいたわけではないが、行き来のできる範囲内に住む華僑同士の付き合いは頻繁に行われていて、「小さな村落の住人であるような感覚」があったことを上記の語りは示している。

さらに、Kさんの生家には、親戚や行き来のできる範囲内に住む人達に加えて、全国に散らばって住む両親の故郷である福建省福清県出身者も出入りしていた。彼らは皆、初めて日本にやってきましたら、同郷の人に仕入れを保証してもらって行商を始めた。彼らは、その後全国に散らばっていくが、近くに住んでいなくとも福清県出身者同士の付き合いは続き、頼母子講によって金銭的にも助け合っていた。Kさんは、「福建省で『探親(たんちん)⁽⁷⁾』に行くと、親が付き合っている人たちの村がわりと近いことがわかりました。」と述べている。特に、「天草の華僑は仕入れの帰りの船便の関係で、よくうちに泊まっていた。」という。また、「仕入れにくるのが同年代の二世の代になると、遅くまでしゃべって、すごく仲良くなった。いとこのような感覚だった。」とも語っている。

以上からKさんの生家では、親戚や近隣に住む華僑、行商を営む福清県出身者が絶えず出入りし、子供ながらに彼らがお互いに助け合っていることを、日常生活において身近に実感して育ったことがわかる。また、Kさんの家庭に出入りする人達は、全国に広がる他の華僑達の噂話を運んできて、これらを日常的に耳にしていたことを以下の語りは示している。

「大体華僑というのは、こうどこかでチャンネルがみなつながっているもんね。だからもう北海道にいる人の話も聞いているし、みたいな感じで。どことかに、どういう人がいて、どうのこうのとか、そういう親の会話で、どこにこういう人がいるって知っている——。」

Kさんは、生家に出入りする人達だけではなく、噂話を通して、直接会ったことのない人々も知った気になりつながりを感じていたことがわかる。福清県出身者は行商を営んでいることによって、全国に散らばり、また移動することによって接触していたという職業上の特徴によっても、噂話が彼らの間で広まっていたのである。

そしてこのような噂話の最大の関心事は息子や娘の結婚話であり、二世の結婚によって、実際に人間関係の網の目が全国に拡大したことが以下の語りに示されている。

「兄弟もね。だんなの方が兄弟が12人、私達の方が10人でしょ。そして、今度娘、息子の嫁ぎ先の親族でしょ。もうそんなんだけでも相当いるから。——そして、それだけじゃなくて、ほら、やっぱり、妹とかが嫁いだ先のまたその親族、そういうのもまたあるでしょ。だから兄弟のあれだけじゃないんですよね。行った先、行った先でまたこうなって、それがつながると、もう100人位すぐなりますよ。——しょっちゅう冠婚葬祭行ってるでしょう。」

Kさんの兄弟は、一番下の弟以外は皆華僑同士で結婚し、姉達は大阪、姫路、大分等へと嫁いでいる。Kさん自身も、20歳で父親の知人の息子とお見合いをして結婚している。Kさんは「子供の頃は親の情報で日本の華僑を全部知っているような気になっていたんですが、大人になって自分の知っている華僑はごく少ないということがわかりました。」と述べている。Kさんの父親の来日した前年である1924年の統計によると、日本における中国人人口1万6529人の内、行商人は約1割の2千人弱である（過 1999：52 表3-3）。全国に散らばっている福建省出身の2千人弱の行商人は、実際の結婚や噂話

によってある程度結びついていたと考えられる。Kさんが周囲の人々の噂話を通して「知っているような気になっていた」人々は、この内の一部であると考えられるが、それを通して全国に広がっているつながりを「想像」することができたのである。そのつながっていると想像できた人々が、Kさんにとっての「中国人」であったのである。つまり、Kさんは、日常生活における具体的な人々との付き合いや噂話を通して、身近な人々とのつながりが全国に広がっていると「想像」し、それを「中国人」として認識していたといえる。Kさんは、「何かしら自分の後ろに大勢の華僑がいるというような漠然とした安心感のようなものを感じていた。」と語っている。全国に広がっていると想像された繋がりによって、「漠然とした安心感」がもたらされたのは、彼らを「仲間」と考え、自分もその一員である共同体と捉えていたからであるといえる。言い換えると、Kさんは、アンダーソンの指摘するような、個人を中心に広がる無限に伸縮自在なネットワークとして（アンダーソン 1997：25）、身近な人々の噂話を通して自分もその一員である「中国人」という共同体を想像していたのである。

Kさんの生家の日常的経験の語りの中で、第二に分類される生活様式の違いについての語りは以下のようなものである。

「私の家庭は『夜は遅く朝は寝坊』であるのに対して、周囲の日本人の家庭はだいたい『早寝早起き』であった。」

「家では洗顔を『セーミンする』と言い、顔を洗うのも足をふくのも同じタオルで、18歳くらいになって、日本人の友人の家で足をふくタオルは別にするのだということを知った。」

「みそ汁を『みそとん』とよんだり、『カーロー（鉄）とって』のように、半分中国語の混じった『我が家言葉』を使っていた。」

「挨拶は簡単で、華僑同士は『ご飯食べた？』であった。また、父親は刺身や牛肉を食べないで、おかずは油いためが多く、盆正月には長崎の興福寺から貰ったお札の前に、ご馳走（鶏、豚料理が主）をテーブル一杯に並べて祝っていた。」

これらの語りは、自らが育った家庭での様々な生活様式を、「日本人」のものとは違うものとして語っている。周囲の「日本人」の家庭と比べて「どことなく違う」と感じる自らの家庭の様々な生活様式を、他の「中国人」の家をいくつか訪れると同じなので、「中国人」と「日本人」の生活様式の違いと捉えている。日常的に感じる様々な生活様式の違いが結びつけられて、「中国人」と「日本人」の生活様式という二つのまとまりとしての同質性が見出されているのである。

換言すれば、彼女は、自分の「仲間」とそうでない人々との間に差異を発見していたといえる。そして、このような二つのまとまりとしての同質性を見出す想像力と、前述したような身近な人々のつながりが、全国に網の目のように広がっているとすると想像力とが同時に働くことによって、彼女の中で「日本人」とは文化的差異をもった仲間によって構成される「中国人」という共同体が創出されたと考えられる。このようにして、彼女は生家の日常生活の狭い経験の中から、「中国人」という自らを位置付ける共同体を認識したのだといえる。だからKさんは現在において「家庭においてしっかり中国人として生きていた。」と語るのだと考える。

筆者は、Kさんに「中国人であること」をどのようにイメージしているのかを尋ねたことがある。Kさんは、子供の頃の家族や身近な人々との関わりの記憶を通して「中国人のイメージ」を形成していることに筆者に問われて気付いたと、以下のように語っている。

「私の場合『中国人像』の原型としては、まず父の姿を思い浮かべるようです。父は先々のことを考えていたと思います。——その他、父がいつも言っていたことから、中国人は借りたら返すがきちんとしている。一回でも返さない人は、それまでの信用を失う。ほとんどの華僑一世は、食うや食わずの極貧時代を乗り越えています。借りを返すのは大変だったので、だからこそ返すことで信用されたのでしょう。こうして書いてみてわかってきたのですが、私が連想する『中国人像』は、華僑一世の姿なんですね。それは両親や、幼い頃家に出入りしていた華僑たちです。親の影響のすごさを、知りました。自分たち二世は、『中国人』

の範疇から、すこしずれているようです。——中国人は（またはうちの両親は）開放的，正直，おだやか，信用を大事にする，ユーモア，独立心，プライドが高い，真面目，よく働く，生活が質素，世界のニュースに敏感，長期展望を抱く，けんかが少ない，昔の華僑社会では噂千里を走る，などでしょうか。私のもつ『中国人のイメージ』は，まわりは全部日本人なのに，身近な家族や親族の持つほんとは少ない情報で，手織りで織り出す『中国人像』なのですね。」

上記の語りは，Kさんが，父親をはじめとする家族や身近な人々とのつながりの延長上に「中国人」の仲間をイメージし，それらの人々が「日本人」とは特質において差異をもった人々として捉えられていることを示している。そして，「日本人」に比べて，「中国人」は良い特質をもったものとして差異化されているのである。Kさんは，親達による日常会話の中で「中国人はよく働き始末をして，成功する。日本人はちょっと成功すると，すぐに遊んでしまう，などなど，親の非常に身勝手な解釈を家庭で毎日のように聞いていた。」という。このような「日本人」と「中国人」を対比する様々な日常的な語りによっても，Kさんは，異なった特質をもつ「中国人」と「日本人」という共同体を意識し，家族を含む「中国人」という共同体を自らがその一員である共同体として認識したのだと考えられる。このような生家での狭い日常的経験の積み重ねの中で，Kさんの中に自らをその一員とする「中国人」という共同体が想像されていったのである。

2. 「日本人」との関係

前節では，Kさんの育った家庭での華僑同士の付き合いに焦点が当てられた。しかし，「中国人」という意識は，あくまで「日本人」に対して形成されているものであり，ここでは，結婚前のKさんやKさんの身近な人々と「日本人」との関係はどのようなものであったのかを検討したい。

歴史的に遡ってみると，1937年の蘆溝橋事件を端に日中戦争が始まり，Kさんより上の年代の華僑達は，日本社会において敵国人として，厳しい差別や排除を経験してきた。Kさんより年上の日本生まれの親戚のSさんは，第

二次大戦前に日本統治化の台湾で日本語教育を受け戦後日本に来たHさんを含めた話し合いの場で、以下のように語っている⁽⁸⁾。

「Hさんの方が恵まれてるね。うちの兄さん(Wさん)の方がもっと厳しいよ。この土地に生まれて、ここで育っていても、日本在住の華僑の方がもっと厳しいよ。」

上記の語りは、戦争中、日本の社会で敵国人として生活することが、日本統治下の台湾で生活するよりも大変であったことを示している。そして、調査の様々な場面で日本社会から受けた差別や排除の経験が話題に上ると、この場面に限らず必ず蔑称で呼ばれたことが語られた。例えば、「シナ」という言葉が議論されていたテレビ番組が話題になった場面では、以下のようなやり取りがなされた⁽⁹⁾。

W：「シナというのは、学説的に決して軽蔑じゃないとかへったらとかいっとけど。」

S：「でも受け取る側が。」

K：「聞いている方がいやがっているのにねー。」

W：「あれね。言われる方が侮蔑とを感じるんだから侮蔑だよ。絶対にそうだ。屁理屈いいよったけど、何をこれ、何が大学教授だと思うさね。」

S：「受け取る側には、確かに侮蔑、バカにされているようないやーな。」

またKさんの実姉は、戦争中でも日本の学校の先生には差別されたことはなかったけど、配給のときに「シナ人」と呼ばれた事を一つだけのいやな思いとして語った。

「配給のこう物並べて、一人ずつ、田中さ〜んとか山田さ〜んとか、うちの時だけシナ人っていう。あれがね。あの一言が、すごい子供心にぐさっと刺さったのを覚えている。」

他方で、戦争中でも「日本人」の中にも具体的な親しい人はいたという。Kさんの親戚のWさんは、蔑視というのは個人的な問題ではなく、社会の風潮であると語っている。

「あの蔑視っていうのはね。あの—そんな個人的な問題じゃなくてね。社会の風潮なんですよ。社会のムードというか、風潮なのよね。民族を蔑視するって。個人対個人になるとね、もうその人の人格やら能力の問題でね。」

以上、戦争を経験したKさんの身近にいた年代の上の人々の話を総合すると、終戦以前の華僑達は、具体的に親しい「日本人」はいても、日本社会全体に「中国人」全体への蔑視が浸透していて、それが蔑称に凝縮され、多くの人がそうした言葉を投げつけられた経験を通して、あるいは実際に石を投げられたりした経験を通して、日本社会全体から排除されているという記憶を刻み込まれていた。それゆえこうした経験をした世代の中には、絶対に帰化をしたくないという人もいる。纏足をしていた母親が石を投げられていたというKさんの親戚のSさんは、以下のように語っている。

「私、私が帰化するというたら、私の母さん、きっと天から涙の雨ふらせてくるという思いが、どっかあるもん。だから、あんた達（娘）がするのは構わないけど、私はしないよっていう感じ。」

しかしながら、Kさん自身は、こうした世代よりも若く、「日本人」との関係は異なっている。戦争中のKさんは、まだ幼く、「疎開先というのは、野山かけまわって、もう楽しかったという記憶ですね。」と語っている。小学校は「Yという中国名で行くからですね。中国人であるということは、もう隠れもないですよ。」入学当時クラスに中国名の子はKさん一人だけで、男の子達にいじめられた経験もあるが、「でもあまり気にしないで、遊びに没頭していたように思います。」と語っている。いじめに対して「怒る」ことはあっても、Kさんのお姉さんが戦争中配給の時に「シナ人」と呼ばれることによっ

て味わったような気持ち，そう呼ばれることによって日本社会全体から排除されていることを感じるような経験をしていないと述べている。それゆえKさんは「中国人」としての意識を，「日本人」を否定されることを出発点としては形成してはいないのである。他方，学校では，親しい「日本人」の友人も沢山できたという。

Kさんと「日本人」との関係を検討する際に以下の二つの語りに着目したい。

「何かしら自分の後ろに大勢の華僑がいるというような漠然とした安心感のようなものを感じていた。」

「上の世代の人々が保護膜になっていて，自分は守られていたと感じていた。」

この「安心感」とか「保護膜」という表現は，Kさんが直接経験しなくとも，上の世代の人々が日本社会からの排除や差別を経験していたことを実感していたことを示している。そして，差別された経験をもつ上の世代の人々の作る「中国人」という共同体の，自らもその一員であるという意識から生み出されている表現である。上の世代の人々は日本社会からの差別や排除を経験してきたが，Kさんは彼らの作る「中国人」という共同体の中にいるので，そうした差別や排除から「保護」され，「安心感」のようなものを感じることができたのである。彼らこそが自分の「仲間」であると考えていたのである。言い換えると，上の世代の経験した日本社会からの差別や排除が，Kさんの中に創出された「中国人」という共同体の境界をより強固なものにしていたのである。

また，上の世代の人達は，日本社会から排除される厳しい時代を経験していながらも，戦後は一般的に，「日本人」に対してそれ程敵意を抱いてはいないという。それは，店を出している熊本に戦後天皇陛下がみえることになったときのKさんの父親の様子についての語りによく表れている。

「やっぱり借りているから天皇さんちゅうのは大家さんみたいなもんで。

やっぱり、この場所を借りて、自分たちがこんなんして生活が成り立っているから、やっぱりきちんと生活してるっていうか、大事に使ってますよみたいに。きれいにして。——だから華僑ちゅうのは、この出店みたいな感覚。そこの場所を許可してもらっているから。それでこういちいちうるさいこともいいたくないし、まあみんなが黙ってそこを黙認してくれたら、自分たちの生活はまあ何とかやっていくからみたいな、そんな感じだと思うんですよ。」

上記の語りにも示されているような、よそ者として外部から来た人間として居候させてもらっているという意識を持った父親のいる家庭では、日常会話の中で「中国人」と「日本人」が対比されても、「日本人」に対する恨みや敵意のようなものは語られなかったという。石を投げられたりしたことがあったら、その事実だけが語られたとKさんは述べている。上の世代のこのような「日本人」に関する日常的語りは、「中国人」であることが、浜本(浜本 1997)が在日コリアンの「朝鮮人」という意識の形成について指摘しているような、「日本人」と思っていたのに日本社会から排除され、「日本人」であることを否定されたことにより形成された意識ではないことを示している。「中国人」であることは、「日本人」とは別の、外部から来てよそ者として居候させてもらっている人間として認識されているのである。このような上の世代の意識は、日常的な語りを通して、日本生まれのKさんにも影響を与えたと考えられる。Kさんも、「中国人であること」を「日本人」とは本質的に異なったものとして認識し、「日本人」として自分を認識したことは一度もないと語っている。上の世代の経験した日本社会からの差別や排除は、Kさんが「日本人であること」を否定したのではない。Kさんの中に創出された「日本人」とは本質的に異なる「中国人」という共同体の境界をより強固なものにしたのである。

Ⅲ. 結婚後—「中国人」としての自己意識の保持

Kさんは、「家庭においてしっかりと中国人として生きていたので、現在も

中国人である。」と語っている。前章においては「家庭ではしっかり中国人として生きていた。」とはどのようなことなのかを、彼女の語りを通して再構成した。ここでは、Kさんが「家庭ではしっかり中国人として生きていた。」ことと「現在でも中国人である。」と考えていることの結びつきについて検討したい。以下、結婚後のKさんのライフヒストリーを検討し、その過程で「中国人であること」がどのような関わりをもっていたのかを検討する⁽¹⁰⁾。

親の知人の息子と結婚したKさんは、夫の親族のいる鹿児島市で20代、30代を送り、3人の息子を生み育てている。鹿児島での生活においては、「中国人」は夫の親族だけであり、核家族で暮らしていたKさんの家庭は、生家のように華僑達の出入りが頻繁にあるわけではなかった。また生活様式は、生家のような「日本人」との違いはほとんどなくなっていった。しかし、夫も「中国人」としての自己意識をもち、三人の息子には常に「中国人であることに誇りをもちなさい」と言って育てたと語った。そして、長男の大学進学を機に、40歳で夫の親戚に囲まれている鹿児島を離れ、福岡に引っ越し、自らもデザインスクールに入った。デザイン・スクール卒業後、就職をしようとしたのだが、その際中高年であることと同時に「中国人であること」によって困難にぶつかる。Kさんは、それまでずっと本名を名乗ってきたので、「中国人であること」は中国名Yによって示せたのであるが、福岡への引っ越しを機に、子供の就職を考えて、日本人である夫の母親の旧姓である日本名Kを使い始めていた。Kさんは、本名を隠すことを会社の上層部から就職の条件として提示され、それを承諾して就職した。その後、6年間本名を隠してその会社に勤め、辞めたときのことを以下のように語っている。

「本名をオープンにして欲しかったが、就職のために譲歩した。約束したからには、言うてはいけないと思い、うそをついているような感じを抱きながら6年ほど勤めて、辞めるとき、皆に本名を言った。そのときは、せいせいした。逆に皆は、あっけにとられていた。」(小学校PTA講演メモ 1990)

上記の語りから、Kさんが「中国人であること」を隠すことを嫌っている

ことがわかる。このようなKさんの「中国人であること」をオープンにするという態度は、この場面に限らず具体的な「日本人」に接するときは、いつでもそうであった。

「私は、なるべく早く中国人というのを言って、じゃないとあとで言うと言う機会がないんですよ。——あの、福岡に来てからは特にね。じゃないと、Kという日本名だから、わかんないから。——私としては、何かそこんところを言っておかないと気持が悪いみたいなどころがあるんですよ。だから子供達にゆってたのは、ああこの人と結婚するかもしれないと思ったら、早めにゆっときよっちゅうて。」

Kさんは、「生まれたときから本質的に中国人だから間違われたくないし、早めに言っとけば、相手も気まずくない」と述べている。相手が長く付き合う友人に限らず、多少の関係がある人にはすべてに、自らが「中国人であること」を最初に言うことにしているという。しかし、他方でKさんは、「中国人であること」を示された「日本人」がそれをどう捉えているのかはあまり気にしていない。例えば仕事上で関わりのある人に最初に「中国人であること」を言ったのであるが、次回会ったら、それを忘れている人もいるそうである。しかし、そのことはKさんにとってそれ程重要ではない。つまり、Kさんは「日本人」にどう思われるかを気にしているために、示しているのではないのである。筆者はKさんに「中国人であること」を「日本人」に言うことによって、何か関係が変わったり、いやな思いをしたことがあったかどうかを尋ねたが、そうした経験はなく、ほとんどの場合好意的に受け入れられたそうである。

その後Kさんは、1級建築士やインテリア・コーディネーターの資格を取り、還暦を迎えた現在でも、女性だけの建築士グループを結成している。主婦が職を得て自立していく過程は、日本社会を構成する一員としての自己を確立させていく過程であるともいえる。しかし、Kさんは、あくまで「中国人」としてそれを達成しようとしたのである。「日本人」に対して「中国人であること」を初めに示し、常に具体的な人との関係を自ら「中国人」と「日

本人」の関係として設定したのである。他方でKさんの「中国人」との付き合いは、結婚後は次第に狭められている。鹿児島では、「中国人」である夫の親族が近くに住んでいたため、彼らとの交流があったが、福岡に引越してからは、兄弟同士でたまに会うぐらいで、かつて親が付き合っていた人達との関わりは全くなくなった。また、生家にはあった生活様式における「日本人」との違いもなくなった。つまり結婚後のKさんの日常生活においては、生家において「中国人」という共同体を想像することにつながった、生活様式の違いを感じることもないし、噂話を運んできた親の知人達との日常的な関わりもなくなったのである。

しかし、Kさんの「中国人」としての自己規定に変化はない。なぜ結婚後のKさんは、「中国人」という共同体の想像につながった生家の日常的経験がなくなっても、自らを「中国人」という共同体に位置付け、日々の生活の中から別の共同体のイメージを創り出すことはないのでしょうか。Kさんに質問したら彼女自身は、以下のように答えた。

「私は、刷り込みによっていったん出来あがった認識は、その後状況が変わっても、なかなか変化しないと思います。——私の生家には『小さな、家庭内中国』という実質があったからではないでしょうか。——生家の家族中、帰化したのは姉妹3人ですが、だれも自分が中国人ではなくなったなんて思っていないんです。だから、その一代で中国人意識が消滅するのは、まずないのではないのでしょうか。——日本の人にはどちらでもいいことですが、私は自分を『日本人と同じ』と思ったことがただの一度もないのです。『私は日本人』という言葉は、私には他人の言葉であり、全く自分の感覚では受け入れ難い言葉です。60歳でこうだから、これは一生変わらないでしょう。」

ここでKさんのいう「『小さな、家庭内中国』という実質」とは、「中国人」という共同体を想像させた生家の日常的経験であるといえる。Kさんは、自らが「中国人であること」を、このような「『小さな、家庭内中国』という実質」によって「刷り込みによっていったん出来あがった認識」であるから変

化しないと語っている。では彼女が生家の日常的経験によって刷り込まれたと語るものは何なのであろうか。それを考える際、筆者は前掲した以下の語りに着目したい。

「——私が連想する『中国人像』は、華僑1世の姿なんですね。それは両親や、幼い頃家に入出入りしていた華僑たちです。親の影響のすごさを、知りました。——まわりは全部日本人なのに、身近な家族や親族の持つほんとうに少ない情報で、手織りで織り出す『中国人像』——」

この語りは現在のKさんの「中国人」のイメージが、過去の生家で関わりのあった人々をめぐるものであることを示している。Kさんにとって「中国人」という共同体は、親をはじめとする幼い頃から生家で日常的に関わった身近な人々との相互作用を通して想像されたものであるが、そのイメージは結婚後その生活が変化しても彼女の記憶の中で存在し続けているのである。Kさんが生家の日常生活によって刷り込まれたものとは、自らがその一員である「中国人」という共同体のイメージだと考える。元々「中国人」という共同体は、想像されたもの、つまりイメージなのであるが、身近な家族や親族を中心に構成される自分もその一員であるような共同体のイメージは、生家の日常的経験から紡ぎ出され、戦前の日本社会の差別排除によって、その境界を強化され、時を経ても記憶の中で崩れていないのである。Kさんは、筆者との調査を通じた関わりの後、「私自身、小さい頃の影響が、これほどにも強いことがわかり、びっくりした次第です。」という感想を述べているのも、それゆえだといえる。現在のKさんが想像する共同体は、記憶の中にある生家での日常生活において想像した共同体と全く同じものではないが、その延長上にあるものと考えられる。延長上にあるものとは、構成員が年を取ったり、亡くなったり、自分の知っていた人が全ての「中国人」ではないことを認識し、また時間を経ることによって「日本人」との差異を失い変質していることもわかっている、つまり全く同じものではないが、別のものではないことを意味している。

相互作用的状况下で民族境界が根強く実体化し続けるのは、一旦自らがそ

の一員である共同体が想像されたら、時間を経ても記憶の中でその共同体のイメージが残り、別の共同体がイメージされることを妨げるからではないだろうか。具体的な身近な人との幼い頃からの日常的経験を通じた想像力により自己の中に創出された共同体であるゆえに、生まれたときからその共同体の一員であると認識されるのである。このようなメカニズムによって「中国人」という共同体の一員であり続けているKさんにとって、「日本人」は決して仲間ではないのである。

IV. 結び

本稿は、日本で生まれ日本の学校で教育を受け、文化的差異がなく、帰化をし日本社会で職を得て生活していながら、自らを民族的他者として規定するという意識がどのように形成されるのかをKさんの事例から分析した。Kさんの民族的他者としての自己意識は、生家の日常的経験を通して、身近な人間関係や噂話から差別や排除のある日本社会の中でお互いに助け合っている「仲間」のつながりを想像し、同時にその仲間が同質性をもつと想像されることによって自己の中に「中国人」という共同体を創出することによって形成されたものであった。そして、この「中国人」という共同体は、それを想像させた生家の日常生活の人間関係や生活様式が婚家では変化してしまっても、彼女の記憶の中でそのイメージが存在し続けたのである。

幼い頃からの具体的な人々と織り成す個人の日常的経験を通じた想像力が、自分がその一員であるような共同体を民族として想像させるとき、民族境界は実体化する。そして、具体的な身近な人々との幼い頃からの日常的経験を通じた想像力によって創出された共同体であるゆえに、日常生活の実態が変化しても個人の記憶の中でその共同体のイメージは存続し、その人にとって「民族」というものが本質的なものとして意識されるのだと考える。今後は、本稿で示したような視座からさらに対象を広げて研究を進めていきたい。

附記

本稿は、平成10・11年度トヨタ財団研究助成金(B)による共同研究「日本に

におけるエスニック・マージナリティー日本の旧植民地出身者で戦前から日本に在住している人々およびその子孫の日本における民族的他者としての自己意識の形成に関する研究」(研究代表者：浜本まり子)の成果の一部である。

(註)

(1) 「はしごはずされたような感じですよ。だからね。こっちはもう一生懸命中国人と
思っていたのに。あーでもないんだなって。あーこりゃ困ったなっていう感じ。」

また、中国に行ったときの事に関して、以下のようにも述べている。

「私達は、華僑なんだという感じですね。もうそれは、だから、いったんもう故郷を離れてしまうと、もうもどってきても、もう変質しているから、そこは、もう、あの居場所じゃなくなるんですね。何かそれは、もう非常に、そこじゃ暮らせないしなーって。」

(2) 例えば載國輝は、居留国の国籍を取得したものは、もはや仮住まいのいわゆる僑民ではないので華人と呼び替えることが妥当だという説を取っている(載 1991:20)。

(3) このような視点は、Kさんを「エージェント」として捉えるといえる。「エージェンシー」
という概念は、構造の優位性に対して、人間が世界に働きかける行為の自発性、変革性、
創造性の側面を指すために用いられるようになった概念である(田辺 1999:65)。

しかし、これは、構造から完全に自由である、自由主義的、主意主義的な個人の主体性を強調するものではないし、またアルチュセールやフーコーによって指摘されているような主体(subject)の確立を、権力構造に対する従属を伴うものとして捉えるものでもない。エージェンシーという概念は、他とのコミュニケーション能力を強調し、個人が具体的な人との繋がりの中で他と交渉しながら行為をなしていくなかで、他との関係性をいかに構築し、変容させていくのかという点に光を当てている点に特徴がある。(田辺 1999:65)。

(4) 本稿の調査において語られた「現実」は、調査対象者と筆者との相互作用の中で生み出されたリアリティであり、両者の関係のあり方がそこに反映されていることには留意している。特にKさんとは、今回の調査以前から10年に渡る個人的な付き合いがある。

(5) 本稿における語りの抜粋には、Kさんや話し合いの場に参加していた人が口頭で語ったもの、Eメールによるやり取りの中の文章、講演記録やエッセイにおいてKさんが書いた文章が含まれる。

(6) 過(1999)の「表3-2 在日外国人人口の推移(1876-1992)」による。原典は、1925年の中国人人口は、『日本帝国統計年鑑』による。

(7) 「探親(たんちん)」とは、親の出身地を訪れることである。日本に住む福建省出身の華僑は、各県が持ち回りで年に一度の同郷会を日本各地で開催しているが、それが1991年に特別に福建省の首都の福州市で行われた時、Kさんの兄弟10人中、Kさんを含めた

7人が参加している。Kさんは、その時同郷会の公的行事の後、親の故郷である福清県高山市を訪れたときのことを、「同郷会の探親」という題のエッセイに書いている。

- (8) この話し合いの場には、Kさん、Kさんの義姉(Sさん)、Sさんの娘、Sさんの兄(Wさん)、台湾出身のHさん、たまたま来訪した中国からの留学生、そして筆者が居合せた。Hさん以外は、皆福建省福清県出身者を親にもつ日本生まれ日本育ちである。小倉の華僑社会の歴史や個人的な体験等、テーマを設定しないで色々な話を1日に渡って聞いた。小倉の華僑社会においては、中国本土出身者であるとか台湾出身者であるとかは、あまり付き合いにおいては関係ないそうである。Hさんだけが台湾出身者であることは、この話し合いの場にいた人達は、今までほとんど意識したことはないとのことである。それゆえ、筆者による、戦前・戦中を植民地支配化の台湾で暮らすのと、敵国人として日本で暮らすのととはどのように違うのかという関心からの質問は、今まで意識したことのない視点だったようである。Sさんは、この場の話し合いによって、台湾出身者と日本に生まれ育った自分達との経験の違いに、初めて気付いたと語った。
- (9) このやり取りも、註8)と同じ場で行われた。ここで話者を示すために使用しているアルファベットは、註8)と同様である。
- (10) 以下のKさんの結婚後のライフヒストリーは、筆者によるKさんへのインタビューと『40歳からの出発』という小学校のPTAでの講演メモ(1990)によるものである。

(参考文献)

- アンダーソン、ベネディクト 1997『増補 想像の共同体』NTT出版
- 茅原圭子・森栗茂一 1989「福清華僑の日本での呉服行商について」『地理学報』27号 17-44頁
- 小熊英二 1998『〈日本人〉の境界』新曜社
- 過放 1999『在日華僑のアイデンティティの変容』東信堂
- 駒込武 1996『植民地帝国日本の文化統合』岩波書店
- 載國輝編 1991『もっと知りたい華僑』弘文堂
- 酒井直樹他編 1996『ナショナリティの脱構築』柏書房
- 田辺明生 1999「人類学・社会学におけるエージェンシー概念について」季刊『南アジア構造変動ネットワーク』vol.2, No.1, 65-66頁
- 谷富夫 1996「ライフヒストリーとは何か」, 谷富夫編『ライフヒストリーを学ぶ人のために』3-28頁。
- 杜国輝 1991『多文化社会への華僑・華人の対応—日本・台湾における華僑学校卒業生の動向分析』(トヨタ財団研究助成報告書019号) 横浜中華学院
- 浜本まり子1996「在日朝鮮人—在日朝鮮人のアイデンティティの問題—」『移動の民族誌』岩波講座 文化人類学第7巻 231-262頁

- プラマー, K. 1991『生活記録の社会学—方法としての生活史研究案内』原田・川合・下田
監訳 光生館。
- 法務省入国管理局 2002『平成13年末現在における外国人登録統計について』
- 松田素二 1995「人類学における個人, 自己, 人生」, 米山俊直編『現代人類学を学ぶ人の
ために』 186-204頁。
- 山田信夫 1983「日本華僑と文化摩擦の研究—インタビューを通じて」山田信夫編『日本
華僑と文化摩擦』巖南堂書店 1-36頁